

特集1

## ズビグ・リプチンスキー

1949年ポーランド生まれの映像作家。『タンゴ』がアカデミー短編映画賞を受賞し注目を集める。政治亡命後、1983年に渡米、数多くのミュージック・ビデオを手がけながら実験的な作品を生み出している。



「タンゴ」

### ズビグ・リプチンスキー再発見

文=瀧 健太郎



「ホリデー」



「マイ・ウィンドウ」



「メディア」



「ステップス(階段)」



「四次元」



「オーケストラ」

皆さんは映像作品を見るとときテレビ画面を意識して見ますか? また映写やスクリーンを、ひよっとしたら最近ではインターネットや携帯電話のモニターを意識して見るでしょうか? 「そんなことは作品の内容とは関係ないでしょ!」というあなた、アナタ、貴方! いえいえ、そうしたことが制度や構造を問う芸術作品のきっかけとなることがあるのです。つまり私達が暮らす現代のマスメディアの問題や、情報社会の在り方を垣間見るひとつの手段は、メディアそのものについて言及するという方法です。

今回取り上げるズビグ・リプチンスキーは1949年ポーランドに生まれ、70年代より欧米で活躍するようになった映像作家です。彼は、その映像作品に 顕著に表れるメディアの制度・構造の問題をさりりと見せつつ、単なるメディアの自己言及だけに終始せず、繰り返される人間の営みの物悲しさを、映像に展開していると言えます。その点で一世代前のビデオ作家にあたるウッディ・ヴァスルカや先日亡くなったナム・ジュン・バイクなどが扱った構造の問題とは一線を画し、リプチンスキーの作品を振り返って見るとは、多様な形で映像を見ることになった現代の私達にこそ意義があるかと思われまます。

初期のフィルムによる作品から、ビデオ作品、ハイビジョン作品に至るまで、彼の一環したテーマとして、「視覚と音楽」、「画面の中の重力の問題」、「映像作品の絵画的性」、そして「皮肉に描かれる人間性」などが挙げられるでしょう。視覚音楽的な初期フィルムにおける音と映像の関係の試みの後、彼は画面の中の重力の問題を扱い、モニターやスクリーンという枠/フレームをあえて観客に意識させ、映像が幻影/イリュージョンだということを考えさせます。画面上の天地や重力の問題を扱うことで、構図や構成という難題から離れることができない絵画の問題を一気に映像の問題として引き寄せたと言えます。

こうした挑戦的なテーマに常に挑み、人間性の皮肉を喜劇的に面白おかしくまとめるのがリプチンスキーならではの表現手法と言えるでしょう。

彼がかの有名なセルゲイ・エイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』(1925年、ソ連)のオデッサの階段シーンを引用する『ステップス(階段)/Steps』(1987年)では、単なるパロディとして描くのではなく、革命を起こそうとするポチョムキン号の水兵達の蜂起の場面に、現代人たちがまるで観光地を訪れるように映画の1シーンに入りこむ様子をコミカルに描くことで、闘争や革命といったものを完全に見世物と化してしまうのです。

当然こうした名作といわれるフィルム作品を、ビデオ合成技術の極めてテレビ的な使用を前面に押し出すことは、メディアそのものの問題を扱うという作者の姿勢の現われでしょう。

『四次元/The Fourth Dimension』(1988年)では、ビデオ映像が光の走査線によって構成されていることから、その走査線を少しずつ遅延させて、ずらしてゆく視覚効果で画像を変化させ、人物や無機物が、何とも言えず有機的に溶解する様を映します。グリがその絵画作品の中で見せる溶ける物体を、映像で実現させたとも言えるでしょう。

『オーケストラ/Orchestra』(1990年)では、古い、怠惰、欲望、暴力、犯罪、歴史、政治、道徳、宗教といったモチーフを優雅なクラシックをバックに、反復、無重力感、果てしない空間の広がり、といった舞台の上に様々な人間模様のハーモニーで表現します。この中で彼は東欧人や革命といった自らが属する文化圏や歴史までも皮肉たっぷりにパロディ化しています。

リプチンスキーは、テレビ的な手法を使用する一方でテレビ的な言説とは異なる表現をしており、また映画的な美学とはまったく違った空間・時間感性と、絵画やダンス、演劇、音楽などを取り込んでしまう方法論は、この時代のビデオアートのあり方の一つの特徴であると思われます。私達はその中で単なる傍観者にもなれますが、リプチンスキーの仕掛けた様々な仕掛けや記号を読み解き楽しみ、そしてメディアそのものと人間の関係などを静かに考えることも出来るのではないのでしょうか。

### リプチンスキーの主な作品

1972年	TAKE FIVE スクエア
1973年	PLAMUZ
1974年	スープ
1975年	ホリデー Locomotive(英題) ニュー・ブック
1976年	隣への道 もう止まらない!
1979年	マイ・ウィンドウ
1980年	Ski Scenes with Franz Klammer(英題) メディア タンゴ
1981年	Inhale-Exhale(英題)
1984年	ザ・デイ・ビフォア 外交官の密やかな愉しみ
1986年	IMAGINE
1987年	ステップス(階段)
1988年	四次元 THE DUEL
1989年	CAPRICCIO NO.24
1990年	オーケストラ
1991年	WASHINGTON MANHATTAN
1992年	KAFKA

ミュージック・ビデオ作品として、  
「CLOSE TO THE EDIT/アート・オブ・ノイズ」  
「HALL IN PARADISE/オノ・ヨーコ」  
「ALL THE THINGS SHE SAID / シンプル・マインズ」  
「THE ORIGINAL WRPPER/ルー・リード」  
「OPPORTUNITIES/ペット・ショップ・ボーイズ」  
「KEEP YOUR EYE ON ME/ハーブ・アルバート」  
「LET'S WORK/ミック・ジャガー」ほか多数。  
その他プロモーション・ビデオやオーブンニング・シーケンスなど。

●色のタイトルは、イメーライブラリー所蔵作品です。

筆者紹介 / 瀧 健太郎

メディア・アーティスト。ビデオ作品やインスタレーション、パフォーマンス、執筆活動などの傍ら、展示会の企画、プロデュースを行う。国内展にキリンコンテンポラリーアートアワード(98)、福井ビエンナーレ8(00)、フィリップモリスアートアワード(02)、Ongoing展(02)、from Scratch(05)他海外上映など多数。

# 特集2 これだけはみておこう！ 必見映画選



タイトル	監督・制作者	制作年 制作国	解説	
工場の出口	リュミエール兄弟	1895年 フランス	シネマトグラフの発明者リュミエール兄弟の最初の映画。これがパリのグラン・カフェで公開されたその時が「映画の誕生」とされている。	<input type="checkbox"/>
月世界旅行	ジョルジュ・メリエス	1902年 フランス	メリエスはフィルム操作によるトリック撮影の発見者。映画に脚本などの演劇要素を取り入れた。月の目にロケットが突っ込むシーンは有名。	<input type="checkbox"/>
イントレランス	D・W・グリフィス	1916年 アメリカ	グリフィスは、数々の新手法を映画に取り込んだ「アメリカ映画の父」。不寛容によって起こった歴史上の4つの事件を同時進行で交互に描く。	<input type="checkbox"/>
カリガリ博士	ロベルト・ヴィーネ	1919年 ドイツ	20世紀初頭の芸術運動「ドイツ表現主義」の最初の映画で代表的作品。精神病者の妄想を奇怪に歪んだ空間と人工的な照明によって描く。	<input type="checkbox"/>
リズム21	ハンス・リヒター	1921年 ドイツ	抽象形態のみで構成される「ドイツ絶対映画」の代表作。ダダイストのリヒターが、映像の運動のみで視覚的リズムを生み出すことを試みる。	<input type="checkbox"/>
極北のナヌーク	ロバート・J・フラハティ	1922年 アメリカ	イヌイットの暮らしを描いたドキュメンタリー映画の草分け。真実を伝える為、時に演出されたフィルムは発見の驚きと喜びで輝いている。	<input type="checkbox"/>
最後の人	F・W・ムルナウ	1924年 ドイツ	ホテルのドアマンが高齢のためトイレ番にされる悲哀。携帯可能になり自由に移動撮影するカメラが、登場人物の内面を雄弁に語る。	<input type="checkbox"/>
幕間	ルネ・クレール	1924年 フランス	バレエ(美術ピカピア/楽曲サティ)の幕間で上映するために制作された。踊り子、屋敷娘などのイメージが抽象的な運動のリズムを作り出す。	<input type="checkbox"/>
バレエ・メカニック	フェルナン・レジェ	1924年 フランス	キュビズムを代表する画家の一人レジェによる映画。リズムや形態の類似によって結び付けられたモチーフによって、映画における対位法を試みる。	<input type="checkbox"/>
戦艦ポチョムキン	セルゲイ・エイゼンシュテイン	1925年 ロシア	ウジ虫入りのスープを飲まされるポチョムキン号の兵士の反乱を、独創的なモンタージュ技法によって映像言語化した映画史上先駆的な傑作。	<input type="checkbox"/>
メトロポリス	フリッツ・ラング	1926年 ドイツ	近未来社会の恐怖を鋭くついたサイレント時代の古典SF。その世界観、都市やロボットの洗練を極めた造形は、その後多くの模倣を生んだ。	<input type="checkbox"/>
アネミック・シネマ	マルセル・デュシャン	1926年 フランス	マルセル・デュシャンが、映画の光学的な効果に到達する、より実際的な方法として制作したダダ映画。螺旋が描かれた円盤が回りつづける。	<input type="checkbox"/>
アンダルシアの犬	ルイス・ブニュエル サルバドル・ダリ	1928年 フランス	無意識から生まれたイメージを脈絡なく連結したシュルレアリスム映画の代表的作品。切り裂かれる眼、手の平の蝶…不条理が強烈な印象を残す。	<input type="checkbox"/>
キートンの蒸気船	チャック・ライズナー バスター・キートン	1928年 アメリカ	久々に父の元に戻る息子は目印にカーネーションをつける。しかし今日は母の日なので同じ花が…。練られた脚本と超人的なアクションが圧巻。	<input type="checkbox"/>
裁かるゝジャンヌ	カール・ト・ドワイヤー	1928年 フランス	デンマークの巨匠ドワイヤーが、ジャンヌ・ダルク裁判を題材に、人間の表情の微妙なクロスアップの積み重ねによる心理描写を追求する。	<input type="checkbox"/>
ひとで	マン・レイ	1928年 フランス	シュルレアリスムのアーティスト、マン・レイは、絵画、彫刻、映画など幅広い創作活動をした。ロベール・デスノスの詩に着想を得た作品。	<input type="checkbox"/>
カメラを持った男	ジガ・ヴェルトフ	1929年 ロシア	「キノ・ブラウダ(映画の真実)」というジガ・ヴェルトフ独自のモンタージュ理論に基づく実験的なドキュメンタリー映画。	<input type="checkbox"/>
フランケンシュタイン	ジェームズ・ホエール	1931年 アメリカ	後の怪奇映画に多大な影響を与えたホラーの古典的作品。首にボルトが刺さった怪物のイメージはこの映画から生まれた。	<input type="checkbox"/>
新学期 操行ゼロ	ジャン・ヴィゴ	1933年 フランス	寄宿学校の管理体制に反抗し、自由を求め革命を起す子供達。羽根を引きちぎり屋根の上を駆け回る小さなアナーキスト達の姿が輝かしい。	<input type="checkbox"/>
丹下左衛門 百萬両の壺	山中 貞男	1935年 日本	庶民の人生の機微を、軽妙な笑いに包んで描いた時代劇版小市民映画。百萬両のありがたが隠された壺をめぐる騒動。	<input type="checkbox"/>
モダン・タイムス	チャールズ・チャップリン	1936年 アメリカ	喜劇王チャップリンが社会の急速な機械化に対し、人間らしさを！と叫んだ傑作喜劇。サイレントにこだわり続けた彼が初めて声を発した作品。	<input type="checkbox"/>
民族の祭典	レニ・リーフェンシュタール	1938年 ドイツ	ベルリンオリンピックの記録映画。力強く荘厳な映像美はナチの美学と合致し、戦後レニはプロパガンダの協力者として非難された。	<input type="checkbox"/>
オズの魔法使	ビクター・フレミング	1939年 アメリカ	30年代に登場したカラーフィルムの色調は現実世界を描くには違和感があった。本作はこれを使い分け、夢の世界のみをカラーで描いている。	<input type="checkbox"/>
ゲームの規則	ジャン・ルノワール	1939年 フランス	貴族の恋愛ゲームの悲喜劇をパロディ化した柔らかな演出で描く映画作りのバイブル的作品。監督は印象派画家ルノワールの次男。	<input type="checkbox"/>
戦ふ兵隊	亀井 文夫	1939年 日本	戦中の記録でありながら勇ましい兵隊はひとりで登場せず、中国の雄大な自然や死にゆく軍馬への眼差しも忘れなかつた一篇の詩のような作品。	<input type="checkbox"/>
ファンタジア	ウォルト・ディズニー(制作)	1940年 アメリカ	クラシック音楽の8つのエピソードがダイナミックに展開するミュージカル・アニメーション。ミッキーも登場するディズニー映画の傑作。	<input type="checkbox"/>
市民ケーン	オーソン・ウェルズ	1941年 アメリカ	弱冠25歳のO・ウェルズが、新聞王ケーンの波乱の人生を描いた処女作。斬新な構成と演出、実験的な撮影法は後の映画史に影響を与えた。	<input type="checkbox"/>
くもとちゅうりっぷ	政岡 憲三	1942年 日本	同時期の日本漫画映画の傑作『桃太郎 海の神兵』とは対照的に、戦時色は微塵も感じられない。その繊細な動きと豊かな詩情には思わず嘆息。	<input type="checkbox"/>
午後の網目	マヤ・デレン	1943年 アメリカ	アメリカ実験映画の発点であり、60年代以降にはフェミニスト映画の先駆としての再定義がなされた。精神的分析的に自叙願望の夢を描く。	<input type="checkbox"/>
モーション・ペインティングNO.1	オズカー・フィッシャー	1947年 アメリカ	油絵をガラス板の上に描いていく過程をコマ撮りした抽象アニメーション作品。曲はバッハの「ブランデンブルグ コンチェルトNo.3」。	<input type="checkbox"/>
自転車泥棒	ピットリオ・デ・シーカ	1948年 イタリア	戦後困窮する人々を同時代的な視点で捉えたネオリアリズムの代表作。商売道具の自転車を盗まれてしまった父子の物語を人情味豊かに描いた。	<input type="checkbox"/>
皇帝の鷹	イジー・トルンカ	1948年 チェコスロバキア	アンデルセンの『ナイチンゲール』を題材にトルンカによって制作されたチェコの人形アニメーション。独自の視点と演出でみせる至玉の作。	<input type="checkbox"/>
オルフェ	ジャン・コクトー	1949年 フランス	前衛映画の系譜を受け継いだ詩人コクトーが描く現代のギリシャ神話。生と死を彷徨する詩人を逆回し等のトリック撮影を用いて幻想的に描く。	<input type="checkbox"/>
色彩幻想 -過去のつらめ気かかり	ノーマン・マクラレン	1949年 カナダ	フィルムに直接塗すダイレクトペイントやスクラッチによる抽象アニメーション。絵に同調する音楽はジャズ界の巨匠オズカー・ピーターソン。	<input type="checkbox"/>
羅生門	黒澤 明	1950年 日本	芥川龍之介『藪の中』の映画化。迫力ある語り口と白黒の中に色彩と風が見える驚異的な光と影の表現は人間のエゴイズムを鮮やかに炙り出す。	<input type="checkbox"/>
くじら	大藤 信郎	1952年 日本	過酷な状況下で炙り出される男たちのエゴイズムと性欲。ピカソやコクトーにも絶賛されたカラーセロファンを用いた影絵アニメーション。	<input type="checkbox"/>
東京物語	小津 安二郎	1953年 日本	尾道の老夫婦が東京で暮らす息子達を訪ねる。独自の美学に基づく研ぎ澄まされた演出で緩やかに崩壊する家族の心を浮き彫りにした傑作。	<input type="checkbox"/>
裏窓	アルフレッド・ヒッチコック	1954年 アメリカ	トリュフォーなど芸術派の作家達も敬愛して止まないサスペンスの神様・ヒッチコックは、豊かな実験精神で多くの映像テクニックを確立した。	<input type="checkbox"/>
大地のうた	サタジット・レイ	1955年 インド	ベンガルの田舎で生活する一家の営みを少年オプーの目を通して描いた。人と自然、動物、雨や汽車までが同質に描かれた詩情溢れる風物詩。	<input type="checkbox"/>
浮雲	成瀬 巳喜男	1955年 日本	敗戦後の虚無感の中で転落してゆく一組の男女を描いた。理屈で割り切れない人間の心情を、眼差しや身ぶりの積み重ねの描写から炙り出す。	<input type="checkbox"/>

■映画 ■アニメーション ■ドキュメンタリー ■実験映像 ■美術 ■舞台/演劇 ■音楽 □その他

「映像学」の発展に貢献したイメー  
ジライブラリーは「芸術作  
品」としての映像を視野におき、劇  
映画だけでなく、アニメーション、  
実験映像、ドキュメンタリーなど  
様々なジャンルの優れた作品を収集  
しています。

「映像学」ではないから映画やア  
ニメーションは関係ない」なんて思わ  
ないでください。優れた映像作品に  
深く踏み込めば、その背後には諸ジ  
ャナルの美術を学ぶ上で活用すべき  
膨大なイメージが隠されているので  
す。創作活動をするみなさんにとっ  
て、それらはインスピレーションの  
すばらしい宝庫となることでしょう。

そこで、イメー  
ジライブラリー  
の所蔵作品の中から、映画史上重要な  
作品だけでなく、芸術として特筆す  
べき作品、実験精神に溢れた作品、  
デザイン的に優れた作品など、ム  
サビで学ぶみなさんにぜひ観てお  
いてほしい作品というテーマの  
もと、そのほんの一部をピックアップ  
しました。一四〇〇作にも及ぶ  
所蔵作品の中から、限りある誌面に  
掲載する作品を選抜するのは非常に  
難しく、ここではあえて一人の監督  
につき一作品、または大きなムーブ  
メントのなかでの代表作を一点とい  
った要領で(断腸の思いで)大きく  
絞っています。これらは、これから  
映画を観ていくための地図として、  
または一つの指針として活用してい  
ただけるのではないかと思います。  
普段なかなか観ることができない貴  
重な作品も多々あります。このリス  
トにある作品をすべて観てみるのも  
良いでしょうし、これを足がかりに  
してさらに開拓するのも良いでしょ  
う。新しい映像体験を求めて、ぜひ  
映像作品の世界に一步踏み込んでみ  
てください。

◇全170作は、映像学教授の指導  
のもと、本学の授業で頻繁に取り上げ  
られる作品や、映画史的な位置付けを  
考慮した上で選抜しています。



ドイツ零年  
ロベルト・ロッセリーニ 1948年/イタリア

映画の冒頭、敗戦まもないベルリンで撮影された真実の姿は圧倒的な迫力である。瓦礫の中で生き延びる人々は、もはやモラルや慈愛の精神を持ち合わせてはいない。けなげに生きる少年を軸に、戦争が招いた悲劇を冷静な眼差しで描くネオリアリズムの代表作。



雨月物語  
溝口 健二 1953年/日本

江戸時代の怪談集を基に、乱世の時代に欲にとらわれた人間の姿を綴った絵巻物のような時代劇。ワンシーン・ワンショットの人物凝視による演出により画面には気迫が満ち、闇と光の濃淡で描かれた妖艶な死霊との戯れに特筆される幽玄美は白黒映像の極致である。



大人は判ってくれない  
フランソワ・トリュフォー 1959年/フランス

家庭や社会から疎外され、ついには感化院送りになってしまう多感な少年の姿を、即興演出とロケ撮影によるのびやかな映像で描いたヌーヴェル・ヴァーグの代表作。監督トリュフォーの自伝的要素の濃い作品で、その後約20年に渡り続編4作が制作された。



ラ・ジュテ  
クリス・マルケル 1962年/フランス

人類が絶滅した世界からタイムトラベルした男は過去の世界で見覚えのある女性に出会う。記録映画作家のマルケルが記憶への想いを描く詩的SF映画。白黒の静止画とモノローグで綴る映像は凝縮された記憶そのものであり、映像の無限の可能性を示した衝撃作。



フェリーニの8½  
フェデリコ・フェリーニ 1963年/イタリア

次回作に行き詰った映画監督ガイドは療養先でも仕事や愛人に悩まされ、ついには自分の妄想世界へと逃げ込む。現実と夢とが並行する幻想世界で彼は気付く。「映画も人生もカーニバルだ!」。嘘をもって真実を浮かび上がらせる「偉大な嘘つき」フェリーニの自伝的傑作。



2001年宇宙の旅  
スタンリー・キューブリック 1968年/アメリカ

科学的根拠に基づく徹底したリアリズムの追求やクラシック音楽の起用など、それまでのSF映画の常識を覆した傑作。人類創生から人類の誕生までを描く。ヒトザルが投げた骨がゆるやかに下降しながら宇宙船にすりかわるジャンプカットは、映画史に残る名シーンである。



薔薇の葬列  
松本 俊夫 1969年/日本

ゲイの少年が母を殺し父と交わるという現代のオディブス神話を、素人のゲイボーイや主人公へのインタビュー、新宿街頭でのグリラ撮影等を取り入れた虚実ないまぜの実験的手法で描く。監督は映像理論、ドキュメンタリー、実験映像の世界で活躍する松本俊夫。



リトアニアへの旅の追憶  
ジョナス・メカス 1969-72年/英・西独合作

リトアニアからアメリカへ亡命し、27年後に母や友人達と再会するまでの日々を3部構成でまとめたメカスの代表作。メカスはアメリカ実験映画史に絶対的な影響力を持つ作家・オーガナイザー。本作のように、日常生活の断片的な記録を集積した「日記映画」というスタイルを生み出した。



鏡  
アンドレイ・タルコフスキー 1975年/ソ連

ロシアの映像詩人による記憶と夢のイメージで織り込まれた美しい映像詩。幼少の記憶、夢の中の風景、戦争の記録フィルムなどを用いて幻想的なイメージにより人生の感覚を映像で伝えようとした純粋な試み。映像の快楽とも言うべき幸福な時間に立ち会う。



タクシー・ドライバー  
マーティン・スコセッシ 1976年/アメリカ

世界の不浄さに苛立ちを募らせ、大統領候補の暗殺を企てるベトナム戦争帰りの孤独なタクシー・ドライバーの姿を通し、都会に潜む狂気を浮き彫りにする。社会通念を欠いた鬱屈した青年の心の闇が、凄惨な暴力の現場へと収束していく過程には息を呑む。



パワーズ・オブ・テン  
チャールズ&レイ・イームズ 1977年/アメリカ

公園でピクニックする男女を起点に、10の累乗のスピードで宇宙から原子核までを旅する。イームズ夫妻は革新的なデザインで近代家具の歴史に大きな進展をもたらした一方で、映像の分野でも優れた作品を数多く残した。イメー  
ジライブラリーは49作品を所蔵している。



対話の可能性  
ヤン・シュヴァンクマイエル 1982年/チエコ

アニメーションの手法で人間の様々な対話の諸相を3部構成で描く。果実や台所用品でできた顔同士がお互いを食らいあい咀嚼する『永遠の対話』、粘土で男女の愛を描く『情熱的な対話』など。人間のコミュニケーションの断絶や誤解を哲学的に風刺している。



「DRILL」1983年 「草迷宮」1979年 「イレイザーヘッド」1977年 「道成寺」1976年 「旅芸人の記録」1975年

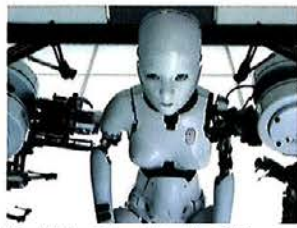
タイトル	監督・制作者	制作年 制作国	解説	
土方巽 夏の嵐	土方巽(出演)	1973年 日本	戦後日本の前衛ダンスの牽引者であり「暗黒舞踏」の創始者である土方巽は、'73年京都大学講堂における舞踏をもち自らの舞踏を封印した。	<input type="checkbox"/>
ファンタスティック・ブラネット	ルネ・ラルー	1973年 フランス	青い肌・赤い眼の巨人が支配する惑星が舞台のSFファンタジー。切り紙アニメーション独特の動きでローラン・トポールの絵は奇怪さを増す。	<input type="checkbox"/>
インディア・ソング	マルグリット・デュラス	1974年 フランス	映像と分離した「オフの声」画面に現れない者たちの対話によって、記憶と忘却とのせめぎ合いを表現しながら、熱狂的な愛の物語を綴る。	<input type="checkbox"/>
蛙の求婚	イブリン・ランバート	1974年 カナダ	鏡を腰に下げた蛙が、美しい白ネズミにプロポーズ。スコットランド民謡に合わせたアニメーションで、黒い背景に色鮮やかな切り紙が映える。	<input type="checkbox"/>
カッコウの巣の上で	ミロス・フォアマン	1975年 チェコスロバキア	刑務所の強制労働を逃れるため狂人を装い精神病院へ移送された男は、完全に管理された不条理な世界でやがて本物の狂人になっていく。	<input type="checkbox"/>
ジョーズ	スティーブンスピルバーグ	1975年 アメリカ	巨大人喰い鮫と人間との戦いを描いたパニック映画。細部まで設計されたショットや人物描写など弱冠27歳の監督の演出力に目を見張る。	<input type="checkbox"/>
旅芸人の記録	テオ・アングロプロス	1975年 ギリシャ	旅芸人一家の物語を軸に現代ギリシャ史を旅する壮大な映像叙事詩。奇跡のような長回し撮影で描かれる圧倒的なスケールの映像美は必見。	<input type="checkbox"/>
アラバスク	ジョン・ウィットニー	1975年 アメリカ	コンピュータ・グラフィックの先駆者ジョン・ウィットニーの代表作。様々な線や図形が複雑な運動を繰り返す抽象映画。	<input type="checkbox"/>
優しい金曜日	田名網 敏一	1975年 日本	アニメーションや版画など、幅広い創作活動を続けるグラフィック・デザイナーの田名網敏一が、自身の少年時代の記憶を走馬燈のように綴る。	<input type="checkbox"/>
道成寺	川本 喜八郎	1976年 日本	日本を代表する人形アニメーション作家・川本喜八郎が、能や歌舞伎の題材となった安清浄姫伝説を脚色、女の情念と業を独自の様式美で描く。	<input type="checkbox"/>
アニー・ホール	ウディ・アレン	1977年 アメリカ	ハリウッドと対極にある“ニューヨーク派”監督のウディ・アレンが、風刺と皮肉を効かせながら、都会人の孤独を浮き彫りにする恋愛悲喜劇。	<input type="checkbox"/>
イレイザーヘッド※1	デビッド・リンチ	1977年 アメリカ	不可解さに満ちていながらも抗い難い魅力をもつ初期の“リンチ・ワールド”。不気味な赤ん坊の父親になった男の悪夢と妄想を描く。	<input type="checkbox"/>
変身	キャロライン・リーフ	1977年 カナダ	ガラス板の上に置かれた砂で絵を描き、下から光を当てるといふ技法で作られたアニメーション。砂の陰影が画面に豊かな表情を与えている。	<input type="checkbox"/>
ディア・ハンター	マイケル・チミノ	1978年 アメリカ	200万人以上の死者を出したベトナム戦争。アメリカの犯した誤りや精神的肉体的後遺症、挫折感をロシア系移民の心の裏に重ね描いた秀作。	<input type="checkbox"/>
地獄の黙示録	フランシス・F・コッポラ	1979年 アメリカ	ジャングルの河沿いに悪夢のように浮かび上がる戦争の狂気。人間の根源的な恐怖を暴き、公開当時賛否両論を巻き起こしたベトナム戦争映画。	<input type="checkbox"/>
十九歳の地図	柳町 光男	1979年 日本	上京してきた新聞配達員の青年は人々への憎しみを込め地図を作る。行き場の無さと孤独、場末の町を舞台に憤りに満ちた青春を描く異色作。	<input type="checkbox"/>
草迷宮	寺山 修司	1979年 日本	泉鏡花の原作から、青年の手紙探偵に仮託した母追慕の物語を、幻想・過去・現在を交錯させる手法で紡いだ哀切な抒情に溢れた物語。	<input type="checkbox"/>
リフレクティング・プール	ビル・ヴィオラ	1979年 アメリカ	ビル・ヴィオラは現代美術においても高く評価されるビデオ・アーティスト。森の中のプールをビデオ的手法で捉え時間の重層化を試みる。	<input type="checkbox"/>
王と鳥※2	ポール・グリモー	1979年 フランス	中世的な世界にロボットなどのSF的要素がふんだんに盛り込まれたファンタジー。宮崎駿にも多大な影響を与えたことが随所に見取れる。	<input type="checkbox"/>
話の話	ユージ・ノルシュテイン	1979年 ソ連	オオカミの子を狂言回しに綴る叙事詩アニメーションの一作。母の守り唄、戦争に駆り出される男たち。子供時代の思い出を詩情豊かに描く。	<input type="checkbox"/>
ツイゴインエルワイゼン	鈴木 清順	1980年 日本	サザサレーのレコード盤が誘う、現実と幻想の交錯した狂気の世界。鬼才・鈴木清順が極彩色で彩る、生と死、エロスの沸き立つ大胆な幻想譚。	<input type="checkbox"/>
タンゴ	ズビグ・リブチンスキー	1980年 ポーランド	飛び込んだボールを取りにきた少年を筆頭に、順々に人が室内に入ってくる。数千枚のコマをタンゴのリズムに合わせて構成した不思議な作品。	<input type="checkbox"/>
泥の河	小栗 康平	1981年 日本	戦後の日本が復興し始めた昭和31年。大阪の河川に船で売れながら生きる親子がいた。社会の底辺で生きる人々を描いたドラマ。	<input type="checkbox"/>
コヤニスカッティ	ゴッドフリー・レジオ	1982年 アメリカ	コヤニスカッティとはアメリカ先住民ホピ族の言葉で「平衡を失った世界」の意。文明と自然の関係をナレーションのない圧倒的な映像で綴る。	<input type="checkbox"/>
フィツカラルド	ヴェルナー・ヘルツォーク	1982年 ドイツ	神話的世界を見つめ続ける超時代的作家・ヘルツォークが、ペルーの未開の地でオペラハウスを建設しようとする男の物語を描く。	<input type="checkbox"/>
ルアッサンブラージュ	トリン・T・ミンハ	1982年 アメリカ	客観的記録を批判し、意味とフレームから解放された「眼差しの映像」をもってアフリカの女性を捉えた作品。柔らかな繊細なカメラが美しい。	<input type="checkbox"/>
天使	ハトリック・ボカノウスキー	1982年 フランス	7つのシークエンスからなる悪夢的映像詩。美しくも神経症的な弦の音と細密な特殊効果撮影から生み出された鮮烈なイメージの奔流。	<input type="checkbox"/>
ボーイ・ミーツ・ガール	レオス・カラックス	1983年 フランス	80年代のフランス映画界で最も作家的な生き方をした「恐るべき子供」カラックス。自らの魂を吐露した夜のハリウの情景は美しくも物悲しい。	<input type="checkbox"/>
ラルジャン	ロバール・ブレッソン	1983年 フランス	偽札によって破滅へと導かれる青年。孤高の映画作家ブレッソンの、台詞と演技を極力排した禁欲的な演出が、より鋭く研ぎ澄まされた遺作。	<input type="checkbox"/>
風櫃の少年	ホウ・シャオシェン	1983年 台湾	兵役を直前に控えた少年達の無為でかけがえのない時間を捉えた青春映画。のびのびとした新しい肌触りを持つ台湾ニューウェイブの代表作。	<input type="checkbox"/>
家族ゲーム	森田 芳光	1983年 日本	囁くような会話、音楽は一切使用せず現実音を誇張した音処理、ねじれた空間…。現代の家族関係をシニカルにシュールに描くホームドラマ。	<input type="checkbox"/>
DRILL	伊藤 高志	1983年 日本	社会の内外の境界である集合住宅の下駄箱の空間を歪曲した世界観でみせる。体育館をスチールでコマ撮りした『SPACY』も初期の代表作。	<input type="checkbox"/>
カオス=シチリア物語	タビアーニ兄弟	1984年 イタリア	原作はピランデルロの短編集『一年間の物語』から選ばれた6話から成る。カラスが狂言回しとなり描かれるトスカナノ美しく幻想的な物語。	<input type="checkbox"/>
ストレンジャー・ザン・パラダイス	ジム・ジャームッシュ	1984年 米/西独	ワンシーン・ワンカットで冴えない若者の日常を描いた低予算映画。独特の感性が各方面で話題となり、インディーズブームを巻き起こした。	<input type="checkbox"/>
パリ、テキサス	ウィム・ヴェンダース	1984年 西独	放浪から帰還した男が幼い息子と絆を確かめながら失踪した妻を捜す。ドイツ監督がアメリカの風景の中に描く家族の再生と人間の孤独。	<input type="checkbox"/>
ダウンサイド・アップ	トニー・ヒル	1984年 イギリス	カメラが水平垂直方向に回転運動を繰り返しながら半周ごとに新たな空間へ移行する。カードの表裏のように世界を切り取った驚きのカメラ眼。	<input type="checkbox"/>
ジャンピング	手塚 治虫	1984年 日本	漫画界の巨匠・手塚治虫は、実験アニメーションの世界でも大きな功績を残した。ジャンプし続ける子供の視界をワンカットで描いた作品。	<input type="checkbox"/>
パラダイス	イシュ・パテル	1984年 カナダ	インドの古い詩を題材にした切り紙アニメーション。絢爛豪華な王宮は、背景画に穴を開け、後ろから光を当てるといふ手法で制作されている。	<input type="checkbox"/>
未来世紀ブラジル	テリー・ギリアム	1985年 イギリス	コンピューターに全てを管理された近未来を描いたSF映画。アナログ表現による豊かで奇様なイメージの世界は子供の頃見た怖い夢のようだ。	<input type="checkbox"/>
ショア	クロード・ランズマン	1985年 フランス	ユダヤ人大量虐殺の当事者達の証言のみで作られた衝撃作。人間の記憶のみで作られたこの映画は表象不可能な地獄を私達の脳裏に垣間見せる。	<input type="checkbox"/>

※1 『イレイザーヘッド』は、1977年公開版の音響に不満をもっていた監督のデビッド・リンチが、1993年に自ら音響をドルビー・ステレオ化し『イレイザーヘッド完全版』として再構成した。  
 ※2 グリモーは1947年に『やぶにらみの暴君』の制作に着手したが、4年経っても完成せず、プロデューサーがイギリスでラストを追加して完成させてしまう。この不本意な公開から27年を経てグリモーが完成させたのが本作『王と鳥』である。



「ざくろの色」1971年 「心中天網島」1969年 「気狂いピエロ」1965年 「人間動物園」1962年 「第七の封印」1956年

タイトル	監督・制作者	制作年 制作国	解説	
第七の封印	イングマル・ベルイマン	1956年 スウェーデン	騎士は死神に死を賭けてチェスの勝負を挑む。中世世界の人間と死の戯れを、厳格な演出と宗教画のような美しい映像で描いた神祕劇。	<input type="checkbox"/>
ピカソ-天才の秘密-	アンリ・ジョルジュ・クルーゾー	1956年 フランス	常にひとつの形に固執することのないピカソの大胆な筆づかいを間近に捉える。クルーゾー監督の被写体の捉え方は記録映画の域を越えた。	<input type="checkbox"/>
幕末太陽傳	川島 雄三	1957年 日本	幕末の品川遊郭に居るひとりのお調子者を描く傑作コメディ。職人芸の域に達したスピード感溢れる演出と一瞬の静。鬼才・川島雄三の代表作。	<input type="checkbox"/>
ぼくの伯父さん	ジャック・タチ	1958年 フランス	だぼだぼコートに雨傘、くわえパイプがトレードマークのユロ伯父さんが巻き起こす騒動を描いた長編喜劇。ポエジー溢れる町の描写が楽しい。	<input type="checkbox"/>
灰とダイヤモンド	アンジェイ・ワイダ	1958年 ポーランド	対独レジスタンスの青年にもたらされる悲劇。ナチス解放後もソ連の支配から脱し得なかった祖国の内情を“ポーランド派”監督が直視する。	<input type="checkbox"/>
アメリカの影	ジョン・カサヴェテス	1959年 アメリカ	ハリウッドの製作システムを否定し、自主製作の道を切り拓いたカサヴェテスの処女作。シナリオのない即興演出で、異人種間の愛に肉薄する。	<input type="checkbox"/>
若者のすべて	ルキノ・ヴィスコンティ	1960年 伊/仏	南部からミラノへと移住してきた貧しい一家が、大都市の中で崩壊していく様を描いた叙事詩。監督は『ベニスに死す』等の耽美的作品で有名。	<input type="checkbox"/>
情事	ミケランジェロ・アントニオーニ	1960年 イタリア	突然失踪した女性を探す親友と婚約者。謎はいつしか二人の情事にすり替わる。愛の不毛、コミュニケーションの不在、時代の倦怠感を描く。	<input type="checkbox"/>
地下鉄のザジ	ルイ・マル	1960年 フランス	少女ザジのハリ見物の模様を描いたたたばた喜劇。原作者はシュルレアリストのR・クノー。エッフェル塔の螺旋階段のシーンは圧巻。	<input type="checkbox"/>
裸の島	新藤 兼人	1960年 日本	瀬戸内海の孤島で生きる一家。水のない島に夫婦は毎日対岸から小舟で水を運ぶ。人間の営みを一切の台詞を排し映像と音のみで描いた映像詩。	<input type="checkbox"/>
ドッグ・スター・マン	スタン・ブラッケージ	1961年 アメリカ	アメリカ実験映画史上の古典的作品。血液や内臓といったミクロから宇宙的マクロまでの映像断片が交錯し、宇宙論的イメージが湧出する。	<input type="checkbox"/>
去年マリエンバードで	アラン・レネ	1961年 フランス	男の言葉に従い、女は覚えてはいない去年の情事の記憶を作り上げていく。シムトリー構図の中で紡がれる時間と空間、意識と無意識の迷宮。	<input type="checkbox"/>
黒い十人の女	市川 崑	1961年 日本	男への復讐を図る十人の女たち。モノクロ画面を活かしたスタイリッシュな映像は、市川崑のモダニズムの真骨頂。女優陣の華やかさも魅力。	<input type="checkbox"/>
水の中のナイフ	ロマン・ポランスキー	1962年 ポーランド	船上の閉じた空間で次第に狂気を帯びてゆく3人の男女を、繊細なグレーの色彩と抑えた台詞、ジャズを用いて簡潔かつ鋭利な演出で描いた。	<input type="checkbox"/>
長距離ランナーの孤独	トニー・リチャードソン	1962年 イギリス	イギリスの労働階級と体制への反逆を描くフリー・シネマの代表作。感化院に送られた少年の怒りと自尊心を生き生きと描く。	<input type="checkbox"/>
人間動物園	久里 洋二	1962年 日本	武満徹のヴァーカリズムに合わせ、檻の中で男は女に犬のようにあしらわれ、リードで引っ張られる。ブラックユーモアの効いた作品。	<input type="checkbox"/>
十三人の刺客	工藤 栄一	1963年 日本	シムトリーやクロス・アップなど独特の構図で描写した時代劇サスペンス。悪徳藩主を討ち取る13人の武士の策略を描く“集団時代劇”。	<input type="checkbox"/>
鼻	アレクサンダー・アレクセエフ	1963年 フランス	ピンスクリーンの創始者による作品。ピンの凹凸によって描かれた絵は白から黒までをつなぐハーフトーンの豊かな色調を見せている。	<input type="checkbox"/>
奇跡の丘	ピエロ・パオロ・パソリーニ	1964年 イタリア	詩人、作家、批評家、画家など多岐にわたって活動した急進的作家・パソリーニの表現形式が確立された作品。〈マタイによる福音書〉の映画化。	<input type="checkbox"/>
砂の女	勅使河原 宏	1964年 日本	安部公房の小説を映画化した前衛的傑作。砂丘地帯の穴に閉じ込められた男の不条理な心理変化と、強迫的な砂の造形美。	<input type="checkbox"/>
赤い殺意	今村 昌平	1964年 日本	雪国を舞台に抑圧された女の成長を斬新なカメラワークで描く衝撃作。人間の欲を真直ぐ見据えた圧力のある演出で“悲喜劇”と呼ばれた。	<input type="checkbox"/>
気狂いピエロ	ジャン・リュック・ゴダール	1965年 仏/伊	全編シナリオなしの即興演出と、既成の映像・言葉・音からの引用で構成。既成の映画文法にとらわれない革新的な語り口は世界に衝撃を与えた。	<input type="checkbox"/>
ひなぎく	ヴェラ・ヒティロヴァ	1966年 チェコスロバキア	社会主義全盛期の東欧において自由を謳歌する二人の少女を風刺的に描き、監督のヒティロヴァはこの後数年間映画を撮ることを禁止された。	<input type="checkbox"/>
ポリ・マゲお前は誰だ?	ウィリアム・クライン	1966年 フランス	写真家ウィリアム・クラインが、コラージュなどの前衛的な手法を多用して60年代のハリウのモード界をアイロニカルに描く。	<input type="checkbox"/>
盗まれた飛行船	カレル・ゼマン	1966年 チェコスロバキア	トリック映画の巨匠カレル・ゼマンは実写・書割・アニメーションを組合せ、幻想の世界を描いた。動く銅版画のような『悪魔の発明』も必見。	<input type="checkbox"/>
EMOTION=伝説の午後=いつか見たドラキュラ	大林 宣彦	1966年 日本	映像の随筆師・大林宣彦の原点ともいえる自主製作時代の作品。実験的な手法を駆使し、当時のアンダーグラウンド映画界を沸かせた。	<input type="checkbox"/>
日本春歌考	大島 渚	1967年 日本	60年代の騒然とした東京を舞台に性の歌である春歌を軸に描く異色の青春映画。抑圧された心を春歌に託す青年の姿が当時の時代を体現する。	<input type="checkbox"/>
チチカット・フォーリーズ	フレデリック・ワイズマン	1967年 アメリカ	ダイレクト・シネマの巨匠ワイズマンはマサチューセッツ州の精神異常犯罪者の矯正施設の日常を捉えた。90年まで上映禁止とされた問題作。	<input type="checkbox"/>
初恋:地獄篇	羽仁 進	1968年 日本	孤独な少年とスードモデルの少女の恋を現実と幻想とを織り混ぜて描く。思春期のみが持つ危うい美しさを素人役者での即興演出で描き出した。	<input type="checkbox"/>
イエロー・サブマリン	ジョージ・ダニング	1968年 イギリス	ビートルズとブルー・ミーニー族との戦いをユーモラスに描いたアニメーション。サイケデリックなデザインや実験的手法は今でも斬新的だ。	<input type="checkbox"/>
イージー・ライダー	デニス・ホッパー	1969年 アメリカ	ドラッグ、人種問題、ベトナム戦争…病めるアメリカの姿は今も変わらない。この国の目指す「自由とは?」アメリカン・ニューシネマの代表作。	<input type="checkbox"/>
ケス	ケン・ローチ	1969年 イギリス	炭鉱の町で暮らす少年の唯一の楽しみは餌付けしたハヤブサのケスを訓練する事。くすんだ炭坑町とハヤブサが舞う美しい草原の対比が印象的。	<input type="checkbox"/>
私が棄てた女	浦山 桐郎	1969年 日本	60年代後期の世相を背景に、60年安保で挫折を味わい、今はサラリーマンとして出世コースを歩む男が抱える人生と愛の偽りを描く。	<input type="checkbox"/>
心中天網島	篠田 正浩	1969年 日本	絵や文字で装飾したセットなど独特の美学で近松門左衛門の人形浄瑠璃を映画化。男女の死の逃避行に黒衣の人形遣いが死神のように寄り添う。	<input type="checkbox"/>
エル・トポ	アレハンドロ・ホドロフスキー	1970年 メ/チリ	チリ出身の監督が、子連れのガンマンの決闘と死、復活を旧約聖書になぞらえて描く。暴力と聖性、西部劇と宗教映画が渾然となった異色作。	<input type="checkbox"/>
暗殺の森	ベルナルド・ベルトルッチ	1970年 伊/仏/西独	政治と官能を主題に作品を作り結ぶベルトルッチ監督が、時代に順応しファシズムに傾倒していく青年の姿を通し、ブルジョワ的退廃を批判。	<input type="checkbox"/>
無常	実相寺 昭雄	1970年 日本	近視眼のタバーを犯すという世界観を残像ほどに美しいモノクロの映像美で描く。監督はウルトラマンシリーズ等の脚本も手掛けた実相寺昭雄。	<input type="checkbox"/>
コンセプト・テープ1.2.3	飯村 隆彦	1970年 日本	飯村氏のコンセプトualな構造映画は、映画の物理性と哲学的な要素を提示する。初期作品の『くず』や『AI (LOVE)』も必見。	<input type="checkbox"/>
ざくろの色	セルゲイ・パラジャーノフ	1971年 ソ連	アルメニアの詩人サヤト・ノヴァの生涯を美しい8章の映像詩で綴る。目の醒めるような神祕的な色彩、絵画的な映像はまさに映像魔術である。	<input type="checkbox"/>
ミツパチのささやき	ビクトル・エリセ	1973年 スペイン	内戦が落とす暗い影、大人たちが抱える孤独とを繊細に綴りながら、現実と空想の世界の区別がつかない幼い少女の世界を詩情豊かに描く。	<input type="checkbox"/>



「ディレクターズ・レーベル」シリーズより

「親愛なる日記」1993年

「ストーン」1992年

「数に溺れて」1988年

「78回転」1985年

タイトル	監督・制作者	制作年 制作国	解説	<input checked="" type="checkbox"/>
フィルム・ビフォー・フィルム	ヴェルナー・ネケス	1985年 ドイツ	映画が発明される以前の“動く絵”にまつわる数々の装置を紹介し、知覚現象を利用した動きのイリュージョンの発達史をたどる。	<input type="checkbox"/>
78回転	ジョルジュ・シュウィツゲベル	1985年 スイス	力強いドローイングが生み出す、大胆で躍動感溢れる世界。ワルツに合わせて、回転するオブジェクトを視点の移動と変容によって描く。	<input type="checkbox"/>
ストリート・オブ・クロコダイル	ブラザーズ・クエイ	1986年 イギリス	双子の人形アニメーション作家ブラザーズ・クエイが放つ機械仕掛けと血肉で構成された怪奇幻想の世界は、独特の妖艶さをたたえている。	<input type="checkbox"/>
紅いコーリャン	チャン・イーモウ	1987年 中国	イーモウ監督初期作品の『紅いコーリャン』や『紅夢』には「紅」が印象的に使われている。この色に中国の歴史や文化、人間の感情を込める。	<input type="checkbox"/>
友だちのうちはどこ？	アッバス・キアロスタミ	1987年 イラン	子供たちの自然な表情や振る舞いをドキュメンタリーのようにとらえた奇蹟の一作。イラン版『大人は判ってくれない』。	<input type="checkbox"/>
事の次第	ピーター・フィッシュリ デヴィッド・ヴァイス	1987年 スイス	フィッシュリ&ヴァイスはスイスのアーティスト・ユニット。並べられた日常的な物が次々と引き起こす連鎖反応を即物的に捉える。	<input type="checkbox"/>
ゆきゆきて、神軍	原 一男	1987年 日本	神軍平等兵を名乗る奥崎謙三はウエック残留隊の生存者を訪ね、戦線での事実を追及する。過激な奥崎を原のカメラが追い観客は目撃者となる。	<input type="checkbox"/>
木を植えた男	フレデリック・バック	1987年 カナダ	人里離れた荒野でたった一人木を植えた男は、やがて荒地を緑の大海原へと変えた。流れるようなパステル画のタッチが限りなく温かい。	<input type="checkbox"/>
数に溺れて	ピーター・グリーナウェイ	1988年 イギリス	夫を溺死させようとする同姓同名の母、娘、祖母たち。この死のゲームの絵画的なカットの隅々に、1から100までの数字が散りばめられる。	<input type="checkbox"/>
デカログ	クシシュトフ・キェシロフスキ	1988年 ポーランド	デカログとは旧約聖書の〈十戒〉の意。ワルシャワ郊外のアパートに住む10人の生活を十戒になぞらえた。各話の映画的時間構成は秀逸。	<input type="checkbox"/>
100人の子供たちが 列車を待っている	イグナシオ・アグエロ	1988年 スペイン	映画を見たことのない貧しい子供達に手作りで映画を教える女性教師の物語。『フィルム・ビフォー・フィルム』と併せて見て欲しい一作。	<input type="checkbox"/>
AKIRA	大友 克洋	1988年 日本	2019年の東京湾に建設されたネオ東京が舞台。同名漫画をアニメーション化した“ジパニメーション”の先駆となった大友克洋の作品。	<input type="checkbox"/>
動くな、死ね、甦れ！	ヴィタリー・ビ・カネフスキー	1989年 ロシア	大戦直後のロシアを、シベリアの僻村に光の中に描いたカネフスキー54歳の処女作。絶望と喪失感に閉塞した世界と少年の無垢の眼差し。	<input type="checkbox"/>
その男、凶暴につき	北野 武	1989年 日本	北野武の初監督作品。監督業のきっかけは深作欣二の降板によるものだが、無秩序な暴力と虚無的な死という主題は既に克明に刻まれている。	<input type="checkbox"/>
鉄男	塚本 晋也	1989年 日本	人間の肉体を金属が侵蝕していく暴力と官能。監督が脚本から出演まで1人9役で完成させた強烈なオリジナルイデオロギカルな支持を受けた。	<input type="checkbox"/>
SITE RECITE	ゲイリー・ヒル	1989年 アメリカ	ゲイリー・ヒルは“ビデオ・アートの第2世代”の作家の一人。クロス・アップされた物体の画像と挿入される言葉の相関が生み出す緊張感。	<input type="checkbox"/>
僕の好きなこと、嫌いなこと	ジャン・ピエール・ジュネ	1990年 フランス	好きなこと一車と並走する列車、接着剤の臭い。嫌いなこと一あご鬚だけの男…。ジュネによる独自のイメージの奔流。続きは『アメリ』で。	<input type="checkbox"/>
マッチ工場の少女	アキ・カウリスマキ	1990年 フィンランド	マッチ工場で働く貧乏な少女の復讐劇。切り詰められた台詞と身振りと、豊かなシンプルさというべき独特のたたずまいが妙に可笑しい。	<input type="checkbox"/>
ストーン	アレクサンデル・ソクローフ	1992年 ロシア	白い館で青年は死後の世界から甦ったチェーホフと出会う。湿気を帯び歪んだ白黒の世界、グレーの階調の妖しい美しさは水墨画を思わせる。	<input type="checkbox"/>
ディレクターズカット/ ブレッドランナー 最終版 Ⅲ	リドリー・スコット	1992年 米/香港	近未来を描いたSF映画の代表作。模型によって生まれた壮大なスケールと、シド・ミードによる近未来のコンセプトは未だ色褪せる事はない。	<input type="checkbox"/>
阿賀に生きる	佐藤 真	1992年 日本	阿賀野川と暮らす人々の生活を3年間現地で生活しながら撮影した作品。川のようにゆったりと流れる彼らの時間まほのぼのと可らしい。	<input type="checkbox"/>
光で書く撮影監督 ストラロ	デビッド・トンブソン	1992年 イギリス	光と影をペンにして数々のストーリーを描いてきた撮影監督ストラロ。その撮影哲学、映画理論をインタビューを交えながら紹介する。	<input type="checkbox"/>
親愛なる日記	ナンニ・モレッティ	1993年 伊/仏	監督のモレッティが彼自身を自演。軽妙な風刺を散りばめながら、ペスバでのローマ巡りや露宮宣告などのエピソードを日記風にのびやかに綴る。	<input type="checkbox"/>
青いパイアの香り	トラン・アン・ユン	1993年 仏/ベトナム	フランスでセット撮影されたベトナム映画。女中として働く少女が大人に成長する過程を、美しく、瑞々しく、時には危なげかに描く。	<input type="checkbox"/>
風の丘を越えて-西便制-	イム・ゴンテク	1993年 韓国	韓国の伝統芸能パンソリの旅芸人一家の、血ではなく唄で繋がった絆を力強い演出で描く。監督は韓国の溝口健二と呼ばれる巨匠。	<input type="checkbox"/>
部屋 THE ROOM	園 子温	1993年 日本	自主映画出身の監督・園子温が、自分の死ぬべき部屋を探し求めて彷徨う殺し屋を描く。長回し撮影と粒子の荒れた退廃的な世界。	<input type="checkbox"/>
アンダーグラウンド	エミール・クストリツァ	1995年 フランス	動乱のユーゴ史を力強い映像と音楽で綴った悲喜劇。饗宴と悪夢が交差するカーニバルのような世界観で現代まで続く悲劇を浮かび上げさせた。	<input type="checkbox"/>
GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊	押井 守	1995年 日本	2029年の近未来、攻殻機動隊員たちはネットの海に漂いながら、脳核の一部がオリジナルであることを信じつつ、犯罪捜査の捜査にあたる。	<input type="checkbox"/>
議事堂を梱包する	ヴォルフガング・ペッツ ヨルク・グアグニル・ヒンゼン	1996年 フランス	ドイツの旧帝国議会議事堂を梱包するクリスト夫妻の記録。24年の交渉を経て許可された東の間の梱包の美と、プロジェクトの意味とは？	<input type="checkbox"/>
ローザ・ダンス・ローザ	ティエリー・ドゥ・メイ	1997年 ベルギー	コンテンポラリー・ダンスのカンパニー“ローザ”の初期作品を映像化。反復する身体運動と、ミニマルな音楽・空間の構造的関係性。	<input type="checkbox"/>
A	森 達也	1998年 日本	A=オウム。事件後の信者達にカメラは寄り添う。報道とテレビ、そして私達は彼らが「人間」であることを否定しようとしていなかったか。	<input type="checkbox"/>
プリンス&プリンセス	ミッシェル・オスロ	1999年 フランス	影絵による短編6話のアニメーション。人間のおおしきや愚かさに、ユーモアとエスプリを込め、抒情豊かに描かれた作品。	<input type="checkbox"/>
ヴァンダの部屋	ペドロ・コスタ	2000年 スペイン	破壊されつつある移民街の片隅にヴァンダの部屋がある。去りゆく時間の中で寄り添う人々の姿の中に神聖なまでに美しい一瞬を発見する。	<input type="checkbox"/>
セプテンバー 11 11'09'01	アモス・ギタイ他	2002年 フランス	2001年9月11日、アメリカ同時多発テロをテーマに11人の監督が11分9秒1フレームという制約の中で独自の視点で制作。	<input type="checkbox"/>
マトリクスとしての身体	マリア・アナ・タバナー	2002年 ドイツ	映像と彫刻を中心に創作活動を続けるアーティスト、マシュー・バーニーによる映像大作『クレマスター』シリーズからの抜粋とインタビュー。	<input type="checkbox"/>
アートドキュメンタリー シリーズ	ユーロスベース	-	美術、建築、音楽、写真などあらゆる分野のアーティストの姿や制作過程を、映像作家が独自の視点で切り取ったドキュメンタリー・シリーズ。	<input type="checkbox"/>
現代建築家シリーズ	現代建築家シリーズ	-	カラトラバ、ル・コルビジエ、安藤忠雄など、優れた建築家たちの作品を紹介、現代建築の潮流を探る。	<input type="checkbox"/>
ディレクターズ・レーベル	クリス・カニンガム他	-	クリス・カニンガムやミッシェル・ゴンドリーなど、傑出するミュージック・クリップの監督作品をまとめたDVDシリーズ。	<input type="checkbox"/>

※3『ブレッドランナー』は1982年に初公開されたが、1992年のディレクターズカット版で新たなシーンが盛り込まれ、監督リドリー・スコット自身の解釈による編集バージョンが最終版として公開された。

■映画 ■アニメーション ■ドキュメンタリー ■実験映像 ■美術 ■舞台/演劇 ■音楽 □その他

・作品は制作年順に並んでいます。

・タイトルとジャンルは作品のものを表記しています。作品が収録されている資料のタイトル・ジャンルとは異なる場合があります。

・資料の保管場所や貸出状況などの詳細情報は、イメージライブラリーの検索システムで調べることができます。イメージライブラリーの検索システムには、学内の端末からもアクセスできます。

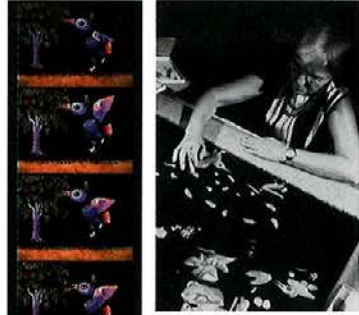


西本 企良

視覚伝達デザイン学科  
専門：情報デザイン  
(アニメーション)

私が視覚伝達デザイン学科で映像コースの助手を務めていた1970年代後半は、まだレンタルビデオや市販のDVDなどは無く、短編のアニメーション作品を見る機会は非常に限られていました。そんな中でわずかに日比谷図書館や日仏学院、またはカナダ、ドイツ、ベルギーなどの大使館が16ミリフィルムを貸し出していて、毎週アニメーションに興味を持つ学生たちと一緒に、借りてきた作品をむさばるように見たものです。その中の一つに『二羽の小鳥』を始めとするイブリン・ランバートの幻想的な切り抜きアニメーション(Count Animation)がありました。ランバートの作品はどれも寓意的な物語で、環境やアイデンティティの問題などを、ユーモラスに分かりやすく語りかけてきます。また、その画面は黒い背景に色鮮やかなキャラクターが浮かび上がり、独特の雰囲気を出しています。私は若い頃、ランバートの作品をヴァニア(簡易再生機)でコマずつ追って行く事で、誇張や省略などを駆使した切り抜きアニメーションの面白さを知ることができました。

彼女の作品に登場するキャラクターは、頭や胴体などのパーツが糸や金具などで結合されておらず、その為パーツの置き換えに自由度が増して自然な動きが可能になります。また背景を黒くするのは、照明によってできる影を目立たなくするという働きもしていますが、画面に奥行きを与え、結合の繋ぎ目などの省略された部分を想像で補うという効果も生んでいます。コマずつ見ていくと、飛び上がる時に、閉じた翼がある瞬間から突然開いた翼に置き換わっていたり、不自然な位置に首が長くのびていたり、また振り返る動きでは、全く同じ頭部のパーツを、左向きから右向きのポーズへと使い回したりもしています。限られたパーツを置き換える切り抜きアニメーションの不自由さを補いつつ、逆に動きの面白さを引き出しているのです。そして、それは人間の視覚の習性を熟知し、巧みに利用した結果なのです。私はその後、ユリ・ノルシュテインの超絶的な技法の作品に接し、さらに大きな衝撃を受ける事になるのですが、切り抜きアニメーションという技法のエッセンスは、すでにランバートの作品の中に見る事ができます。そしてそのエッセンスは、これからのコンピュータを使ったアニメーション作りにも、多いに役立ち、私は考えているのです。



上・作業中のイブリン・ランバート  
左・『二羽の小鳥』/1968年

イブリン・ランバート Evelyn Lambart  
カナダ国立映画局(NFB)でノーマン・マクラレンの共同制作者として活躍。『二羽の小鳥』『欲張りブルーージェイ』『失楽園』『蛙の求婚』『ライオンとねずみ』『都会ねずみと田舎ねずみ』の他、ランバートを紹介したドキュメンタリー作品『イブ・ランバート』、マクラレンとの共同作品に『算数遊び』『色彩幻想』『垂直線』『水平線』『モザイク』などがある。



柳澤 紀子

油絵学科  
専門：銅版画  
ミックスト・メディア

私が映像にとりわけ興味を持つようになった最初のきっかけは、1970年代に滞在したニューヨークでの経験にある。当時の私は、ウォーホルやオノ・ヨーコ、荒川修作、飯村隆彦らの作る映画に新鮮な驚きを受けた。彼らは表現の延長に映像制作を置いていたし、その作品はこれまでに見えてきたハリウッド映画とは対極にあった。

その後、帰国した私は詩人の吉増剛造氏と、タルコフスキー、パラジャーノフ、ジョン・メカス、ソクローフらの旧ソ連の作品を観る機会を得た。これらの映画で表現される空間やマテリアル及びイメージは、私が創作する絵画・版画という2次元の表現に日常生活では得る事のできない新たな突破口を提示してくれた。彼らの作品は「未知」というものの境界を視覚でみせる力強さを持っていた。例えばヌメヌメする水辺の映像が「ストーカー」では、水滴が滴り、湯気を浴び、水に浸る、という感覚となり、視覚を通して私の五感の全てで鮮やかに蘇るのである。

私は学生たちと映画を鑑賞するゼミを設けている。そのとき必ず口にするのは「作品を自分の世界に引き寄せて観なさい」として「作品のどこかに隠された自分とのスイッチを探しなさい」ということである。現代の若者はインターネットやサブカルチャーの中で豊かに育ち、仮想空間の中で多くの情報を得る事ができる。しかし一方で私たちが世代が体験してきた泣き、笑い、恐れ、傷つき、汗にまみれ、汚れ、貧困にあえぐという感覚に乏しいのではないだろうか？パゾリーニの『アツカトネ』を観たとき野卑ゆえの美しさを思い、リンチの『ロスト・ハイウェイ』では闇と光のイリュージョンに、またヘルツォークの『フィツカルド』では船の美しさとベルリ二の『白鳥の歌』に心うたれる。映像には人間の中に潜んだ本能的な感覚を呼び覚ます力があるのだと実感する。

創作活動を続ける中で、その軸足をどこに置くのかと己の立ち位置を見つめる時、映像作品から受ける感覚が、私に新しい創作のフィールドを提示してくれるのである。



「ストーカー」  
アンドレイ・タルコフスキー/1979年



脇谷 徹

共通彫塑  
専門：彫刻

インドの農村を舞台にした貧しい一家の悲しい運命が描かれているのだが、気が滅入るような話であるにもかかわらず映画を観終わった時には、不思議な清涼感に満たされたことを覚えている。

人間の貧しい生活や悲しみを描いた映画は必ずしも、この映画は人間社会の貧困や悲しみを描くことが主題でもなければ、同情やそれらを生み出す社会への怒りが主題でもない。貧しく悲しい運命を背負った家族の暮らしがそれを取り囲む農村風景や風物と共に、自然で誇張のない表現で丁寧に描かれている。映画の後半に老婆が死ぬシーンがある。竹林にしゃがみ休んでいた老婆が、いつも間にかこと切れていた。そうとは知らない少女が老婆を起こそうと揺り動かした瞬間、老婆の亡骸が倒れるシーンだ。横倒しになったとき、頭部を地面に打ち付け、ボクッと鈍くこもった音がする。このシーンには驚いた。恐ろしい描写である。そこには、今まで生きていた人間があっけなく死に、骸すなわち物体になってしまったことが冷徹に描かれている。

一家の悲惨な生活ぶりに反して、雨・雲・風・陽光・陰といった自然現象や風景描写はリズムミカルでまことに美しく、随所にちりばめられた音楽と相まってこの映画の大きな魅力となっている。特に人物をロングショットで捉えた映像は圧巻である。人間ドラマの背景としてはなく、人間を取り囲む大きな存在、すなわち自然界の象徴として、これらの自然現象が実に美しく描かれ、森羅万象が映像詩に昇華している。人の生き死も自然であり、自然界の極めてささいな出来事に過ぎないといった東洋的諦観と済ませてしまえばそれまでだが、この映画は思想的映像的表現ではない。映画そのものが思想だといえる希有な作品であろう。

映画は子供の頃より好きで洋画・邦画を問わずよく観ていたが、それはもっぱら娯楽として楽しむものであり、現在もそれは変わらない。しかし、この『大地のうた』を観て以来、私にとって映画が娯楽の枠に収まらなくなってしまうたのである。私は『大地のうた』によって、映画が美術と同じく芸術の一領域であることをあらためて知り、「表現」という点において美術と何ら変わらないことを知ったのだ。自分の直接的な専門領域ではないという気楽さも手伝ってか、映画を通して「表現」のことをあれこれ考える習慣が、この時以来現在も続いている。



「大地のうた」  
サタジット・レイ/1955年



築地正明

武蔵野美術大学映像学科在籍中の2002～2003年にイギリス留学し、ノッティンガム・トレント大学ファイナート・コースで芸術学を専攻。2004年より本大学大学院造形学コースで映画史、映画理論を研究。修論テーマは映画監督ミケランジェロ・アントニオーニ。

アーカイブへの情熱

今日世界中に存在する大小様々な映像資料を蒐集しているライブラリーについて考えてみる時、私たちはおそらく常に一人の人物の名前に思い当たるように思います。すなわちパリのシネマテークを誕生させたアンリ・ラングロワという名に。二十世紀前半の映画作家たちはみな、彼らの作品が後の世代へと残されてゆくという事が、如何に難しい問題であるか、という事実に常に直面せざるを得ませんでした。そして、彼らに抱くことが許されたそのような希望と可能性は、驚くほど僅かなものでしかなかったのです。そのことをジョルジュ・サドゥールは、ある面白い言葉で表現しています。「あなたが毎朝使うクシは『散りゆく花』、『チート』、『まごころ』の断片から作られているのかもしれないのだ」と。すなわちプロデューサーたちによって、高価なネガが処分され、セルロイドを再び生かすために溶かされ、永久に失われてしまわなくてはならない多くの作品を、ラングロワが救ったのだということを知ると、ラングロワは書いています。フィルムは蒐集とその保存という問題における実際上の困難は、上記したような経済主義的なものだけでは勿論ありませんでした。悪名高い検閲による作品の寸断だけでなく、フィルムという媒体は、驚くほど脆弱であり損なわれやすいものでした。今日いわゆる映画史というジャンルが可能であり、私たちがサイレント時代の傑作の非常に多くをフィルムあるいは、ビデオとして観ることができているのは、ラングロワが映画の蒐集と保存に捧げた一生に、その大部分を負っているのです。その上あの奇跡のような作品、ゴダールの『映画史』は、ラングロワが晩年に夢見ていた構想でもあった映画史を確かに昇華しているのだとも言えるのです。

これら上で語ってきた意味において、今日のあらゆる映像資料館は、ラングロワという名前を通過していると言えます。さて、ここで私たちが利用することのできるイメージライブラリーは、そこで働く職員の方たち全員の多くの映画への思いと共に管理され、様々な種類の作品の蒐集という努力——容易に観ることのできない貴重な作品、映像資料や国外からも優れた作品を見出し蒐集するという、限らない——こう言ってよければ——アーカイブへの情熱によって初めて存在しているのです。それ故、私たちの多くは、彼らラングロワの子供たちに對して、そしてこの素晴らしい映画の宝庫に對していつも大いなる喜びと感謝を感じずにはいられないのです。



（補足）イメージライブラリー

アンリ・ラングロワ (1914-1997) 1936年にシネマテークフランセーズを創立。そこに通いつめいた映画好きの青年たち「ゴダール、トリュフォー」等が後にヌーヴェル・ヴァーグの作家として映画史に名を残すこととなった。1968年、ド・ゴール政権下で文化相を務めていたアンドレ・マルローの意向によりシネマテークの事務局長を解任させられる。しかし、フランスのみならず、世界の映画人の抗議を受け、解任は撤回された。当時シネマテークはシャイヨー宮内に位置していたが、1997年の火災をきっかけにベルシー地区に移転し、2005年秋にリニューアルオープンした。

注 2 四十年代以前のフィルムは、非常に可燃性の高いニトロレイト・フィルムによって保存されていたのだが、法律による禁止によって、視覚的には劣るセテート・フィルムが五十年代以降使われるようになった。

注 1 A PASSION FOR FILMS. Henri Langlois and the Cinematheque Francaise. by Richard Roud. 『映画愛アンリ・ラングロワとシネマテーク・フランセーズ』リチャード・ラウド著。村川英訳、リポポト刊。

アンケートへのご協力、ありがとうございます！

昨年11月から12月にかけて実施した「イメージライブラリーに関するアンケート」では、180名の方からご回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。イメージライブラリーのスタッフ一同、皆さんのご意見を参考に、映像研究の場として、よりよい環境作りを目指していきたいと考えています。今回は誌面を借りて、アンケートの中で特に目立った質問やご意見にお答えします。

**資料について**

- 収蔵する資料はどうか選んでいるの？ あるべき作品がないと思います。イメージライブラリーでは、「芸術作品」としての映像を視野におき、映画史上欠かせない作品を中心に、ドキュメンタリーやアニメーションなどのあらゆるジャンル、そして一般に鑑賞する機会が少ない映像作品を収集しています。この収集方針に当てはまる作品であっても、ソフト化されていないものや廃盤のものは収蔵が不可能な場合もあります。
- 貸出可能な資料はどんな基準で決めているの？ 貸出可能な資料を増やして欲しい。イメージライブラリーでは著作権法上、権利者や配給元から館外貸出を許諾された資料のみ貸出を行なっています。しかし、どんなに名作と謳われる作品であっても、著作権法上の処理がなされた上で販売された資料は数が少ないため、入手が困難な場合もあります。また、大学施設であるイメージライブラリーは、運営の仕組みが根本的にレンタルビデオ店とは異なるため、レンタルビデオ店で見かけられる資料であっても、イメージライブラリーでは館内視聴に限る場合もあります。今後も貸出許諾された資料の収集に心掛けてまいりますので、利用者のご理解とご協力の程、よろしくお願いたします。
- 一度に貸出できる本数を増やして欲しい。右記の理由により貸出可能な資料は数が少ないため、現在は貸出の本数を1回につき1本のみにさせて頂きます。ご了承ください。
- 新着資料を分けるようにして欲しい。新着の資料は、館内の雑誌棚上段に置いています（2週間程度）。貸出可能な資料もその間は館内視聴のみの利用に限らせて頂いています。また、館内の掲示板、ホームページ（館内の検索端末、他、9号館Webスペースなど学内のパソコンからアクセス可能）でも新着資料リストを公開していますので、そちらをご覧ください。新着資料は月1〜2回を目安に更新しています。
- 収蔵して欲しい資料がある。資料のリクエストはカウンターに置いてある購入希望用紙に記入してください。

**検索端末について**

- 詳細を見た後、すぐ前の画面に戻ろうとしても、検索結果一覧にしが戻れないので困る。現在はシステム上、すぐ前の画面に戻ることが出来ませんが、将来的には変更を検討しています。
- うまく検索できない。すぐエラーになる。システム上、検索の際には入力したルールを守らないとヒットしません。例えば、アルファベットは大文字で入力する、人名での検索は、姓と名の間にスペースをあける、など。詳しくは端末のヘルプ項目をお読みください。

編集委員 板屋 緑 (映像学科教授)  
下川クミカ 木村美佐子  
田中友紀子 久保田桂子

イメージライブラリー・ニュース 第18号 2006年4月発行  
武蔵野美術大学 イメージライブラリー  
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736  
tel/fax : 042-342-6072  
http://www1.musabi.ac.jp/img-lib/  
禁無断複製・転載

■ 利用案内 ■ 平成18年度は4/18(火)より開館いたします。